

令和 6 年度 全国学力・学習状況調査の結果と総括

今年度、文部科学省は4月18日(木)全国一斉に「学力・学習状況調査」を実施しました。教科に関する内容については今年度の結果を分析し、学習状況調査については、昨年度や今年度の市内、奈良県、全国の中学校の数値とも比較しながら、本校の今年度の傾向を考察しています。

【教科に関する調査結果と概要】

令和6年度の全国学力・学習状況調査の国語と数学の教科に関する調査の本校の平均正答率は、1つの項目をのぞいて奈良県及び全国を上回っています。

今回の教科に関する国の調査結果では、国語は、『自分の考えなどを記述することはできているが、必要な情報を取り出すことや、表現の効果を考え、説明することに課題が見られ、言語活動を通して効果的に資質・能力を育成するために、生徒一人一人がどのような資質・能力を働かせるか意識して学習を進めることができるよう言語活動を工夫することが重要である』と述べられています。数学は、『昨年度、今年度と出題された「データの活用」領域の問題に課題があり、中学校の段階でデータを基に「判断した理由」を説明できるようにするために、小学校段階で言葉と数を使って表現する力を身に着けた上で、中学校段階でデータの分布に着目して考察し判断することについて、その理由を根拠を示しながら説明できるようにすることが大切である』と述べられています。

本校でもそれぞれの課題を検証していきます。

【国語】

全体的には正答率の割合はほぼ高い値を示しています。特に「話すこと・聞くこと」「読むこと」に関する問題では県・全国の割合と比較しても大きく上回っていますが、「我が国の言葉文化に関する事項」の問題は割合が下回る結果となったので、その検証が必要です。

また、具体的な内容としては、基礎的な問題は比較的正解の割合が高くなっていますが、応用問題の正解の割合が低くなっています。原因として、問題の意図を理解できていなかったり、自分の考えをうまく言語で表現することができていなかったりすることが課題であると考えます。

国の指摘にもある一人一人がどのような資質・能力を働かせるか意識して学習を進めるためにいかに言語活動を進めていくかを検討し、工夫していく必要があると考えます。

ただ、今年度は無回答率が0だったことは、普段からあきらめずに取り組む姿勢が培われている良い結果だと考えます。

【数学】

平均正答率は、全体もそれぞれの領域や評価の観点で見ても、いずれも県や全国の数値と比較しても8%近く高い数値となっています。基本的な計算を解く力は身についており、知識・技能は高い数値を示しています。

記述や文章題など問題文を読みとって立式したり表現したりする力が求められる思考・判断・表現の数値は、県や国と比較すると高い値を示していますが、それでも正答率は4割に満たない状態になっています。

普段の授業においても解答へのアプローチや読解を通しての気づきに乏しく、定期テストや実力テストにおいても同様の傾向がみられ、無回答も目立ちます。また、領域をまたぐ問題においても同様の傾向がみられます。その他生活との結びつきにかかわる問題でも想像力の弱さや生活経験の

不足による苦手意識も働いて問題解決に積極的に取り組めていない状況にあります。このような課題を踏まえて、通常の授業の中で経験値を増やし、主体的に調べたり考えたりする課題を取り入れていくことでさらに力をつけていきたいと考えています。

【基本的な生活習慣について】

「毎日、同じ時刻に起きている・寝ている」や、「朝食を毎日食べている」と回答している生徒の割合は昨年度より下がっているもののいずれも90%を超えており、全国・県・市と比較してほぼ同じぐらいの値になっています。

このことから、本校では概ね基本的な生活習慣が身についていると思われます。ただ、「毎日同じぐらいの時刻に寝ている」生徒の割合は、県・市と共に 80%を切っており起床・朝食の割合と比較しても12%程度の差があることから、生徒たちの生活で夜同じ時刻に寝ることが難しい状況が続いていると考えます。

睡眠不足は、朝食を取る時間がなくなったり、食欲不振で朝食を食べることができずに登校してしまったり等、熱中症などの体調不良につながる要因となるので、できるだけ生活リズムを整えることが必要であると考えます

【自己肯定感・自己有用感について】

「自分にはよいところがあると思っている」生徒の割合は80%を超えており、昨年度とほぼ同じ割合です。市や県と同じぐらいの割合ではあるものの、20%弱の生徒が自分のよいところを認められていない現状が続いています。

このことから、道徳や教科授業だけでなく、普段からありのままの自分を大切にすることや自分らしさを認めることの大切さについて考える時間を持つことが必要です。また、自信を持って生きていく将来の自分をイメージし、どんな大人になりたいか考え、自分に必要な力を付けるために、大人や教職員が生徒のよさを肯定し認めることで、生徒自身が自分の良さに気づき、自分を認めることができるようになると考えています。

【人権意識等について】

「いじめはどんな理由があってもいけない」と考えている生徒の割合は、95%を超えており、「人が困っているときに助けている」生徒の割合も県・市と比較してもやや高い割合を示しています。

しかし、昨年度よりも割合が高くなったとはいえ、今年度も「困ったことがあったときに相談できる先生や大人がいる」と答えた生徒の割合が低いことから、心に余裕を持って困っている人を助けることができる生徒を育てることと、生徒自身が安心して大人や教職員に SOS を発信することができ、その発信を大人や教職員がしっかりと受け止められる環境を整えるなど工夫していくことが必要であると考えます。

【学校生活等について】

今年度「学校に行くことが楽しい」や「友人関係に満足している」と回答している生徒の割合が県や市・全国と比較してやや低くなっています。

その反面、「普段の生活で幸せな気持ちになることがある」と回答した生徒の割合は90%を超えており市や県・国と比較しても高い数値を示しているので、日々の生活を充実して過ごしている生徒が多いと考えます。

ただ、1日の多くの時間を過ごす学校生活が充実したものになるように、学習内容や学校生活を教育相談なども活用しながら、日々の生徒のようすを丁寧に見守り、取り組んでいきます。

【主体的・対話的で深い学びの視点から】

積極的に学習に取り組む姿勢は、市・県と比較すると高く、主体的に学習しようとする姿勢は高まっています。

学習内容について、次の学習につなげる事ができている割合は7割を切っていてやや低いですが、考えたり生かしたりすることができている割合は、市や県と比較しても高い数値を示しています。

自分の考えを深めたり、広げたり、わからなかったことを自分で見直し、他の学習で生かすことが、これからの社会で求められる力であり、学びの力を高めることにつながるので、さらに積極的に伸ばしていきたいと考えます。

【タブレットの活用について】

昨年度までの本校のタブレット使用率はきわめて低く、生徒の意識としては週1回以上程度の使用率であると感じていた生徒の割合が56.8%となっています。

(それ以上使っていると感じている生徒も含めると71%です。)

授業だけでなく、さまざまな機会を通じてタブレットを活用していますが、今までは教員の指示のもとで利用していたため、自分のペースでいつでも活用しているという使用感が低くなっていることも原因のひとつであると考えます。

今後文科省の指示にもあるように、生徒だけでなく教員にもタブレットが文房具であるという意識の変革が急務です。いつでも活用したいときに活用できるよう研修も含め推進していきます。